

多読教育の発展的試み 2

竹 森 徹 士 小 玉 容 子 ラ ン グ ク リ ス
(総合文化学科)

Developing English Education through Extensive Reading Methods and Materials 2

Tetsushi TAKEMORI, Yoko KODAMA, Lange KRISS

キーワード：多読 Extensive Reading 英語教育 English Education

1. はじめに

学生の英語力向上を目指して本学で試みている多読教育は、これまで試行錯誤を経ながらも、図書を整備、多読教育の授業への部分的導入、多読教材の活用、多読教材を用いた一般向けの公開講座を行なってきた。2012年度は、これまでの活動に加えて、多読科目を授業に設けたことが新たな試みとなる。これは、総合文化学科英語文化系のカリキュラム見直しに伴う検討を経て設けられたものである。「多読演習A」を1年前期に、「多読演習B」と「多聴英語」を1年後期に、選択科目として開講することにした。

本稿では、2012年度における活動を中心に、それぞれの多読活動の状況と成果について考察し、今後の課題について整理を行ないたい。

2. 多読関連科目の新設

昨年度、英語文化系のカリキュラムの様々な見直しが行なわれ、そこで、多読関連の科目が今年度より設けられることになった。「多読演習」、「多聴英語」という科目で、英語文化系の1年生を対象にした選択科目である。「多読演習」は、前期と後期に設けられ、それぞれ「多読演習A」、「多読演習B」とし

て開講される。

これらの科目は、筆者らのこれまでの多読活動での成果や課題をふまえたものである。筆者らは2009年度後期より1、2年生を対象とした自主参加の課外活動である「多読クラブ」を行なってきた。この活動は、通常が多読研究で行われている学生の半期の読書量や英語の伸びを知るための調査の機会であったが、そうした情報収集も含めて、そもそも本学の学生がどの程度多読に関心を持ち、そしてそれを継続させられるのか、また、本学で多読をスムーズに行なうために、どのような準備、そして教員の支援が必要か、といった、導入にあたっての諸々の課題を知るための試験的試みでもあった。

「多読クラブ」の毎学期の課外活動で問題となったのは、活動時間設定の難しさだった。すべての授業終了後の午後6時に時間設定をしたり、各学期開始時に発表される時間割に合わせて授業の空き時間に活動の時間を設定したりしていたが、こうした対応をしながら活動を続けるには限界があった。また、学生の参加状況を確認していくなかで、多読に対する関心は思ったより高かったものの、自主参加の課外活動という形態で半期以上の継続を見込むことは難しく、結果として読書量の伸び悩みが見られた。

また、通常の授業では、ラング担当の「ライティング」の授業で、部分的に時間を設けて多読を行ってきた。授業内に読書時間、そして読書指導の機会を確保することができ、多読教育という点では一定の成果はあったが、これはライティングの授業の活動の一部であり、多読の位置づけが不十分であった。「多読演習」が設けられたことで、個別の授業としても、教育、カリキュラムの上でも多読の位置づけが明確になった。また、前期と後期に設けられることで、継続した指導を行なうことができ、読書指導の面でも、読書量の面でも向上が期待できる。

「多聴英語」はリスニング教育の一環として設けられたもので、多読用図書の朗読CDを聴くという多聴の時間を授業の一部に入れている。「多読演習」と併せて、多読の機会を増やす試みである。

次セクションでは、今年度前期に開講された「多読演習A」の実施状況について述べたい。

3. 「多読演習A」

2012年度前期、小玉担当の「多読演習A」の受講生数は25名だった。シラバスで示したように、学生が自分の興味とレベルに合わせて本を選び、大意をつかみながら読書をしていく英語演習である。演習内容としては、「黙読」と「音読」が中心で、授業は多読用図書を揃えている図書館の開架閲覧室とグループ学習室を使用した。学生は2つのグループに分かれ、前半と後半で場所を入れ替わり、閲覧室では黙読を、グループ学習室では音読を行なった。



閲覧室での読書

1) 授業の進め方

第1回目の授業では、多読オリエンテーションとして、読書量の目安と目標、達成感の予測などを説明した。過去の「多読クラブ」で配布した案内チラシをもとに以下のような説明をした：読み方として、辞書を引かなくても内容が理解でき、楽しめるものを読むこと。「これなら読める」という感覚を大切にして、徐々にレベルを上げていく。Oxford Reading Tree (ORT) のStage3～Stage7までの82冊を読むと、およそ3万語読破で、多読に慣れる。多読の量は語数で測るが、半期で10万～15万語を目標とする。読書の目安として、1分間に100語の標準的なスピードで読んだ場合、毎週50分×2回=100分で、1万語読める。10週間継続すると10万語になる。10万語を過ぎたあたりから、「もしかしたら多読イケルかも!」と思えるようになり、15万語までいくと読むスピードが上がり、理解力の伸びを実感できるといわれる。¹⁾

多読を初めて体験する学生にこのような説明をし、本学所蔵の多読本をもとに作成した「多読読書記録手帳 1st Stage」を配布した。黙読ではORTシリーズのStage2から始め、Stage2とStage3は10冊程度でウォームアップ的な読書とした。Stage4以降は「容易に読める」という感覚を持った場合は10冊程度で上のStageへ進んでよいことにした。しかし、少しでも難しいと感じたときは、すぐ下のStageに戻り、読み残した図書を読んでから次のStageへ進むように指示した。8回目の授業で手帳をチェックしたが、「少し難しくなった」という感想を持ちながらも先へ進む学生がいたので、9回目の授業でStage7以降は所蔵図書すべてを読むように追加の指示を出した。簡単だと思えるレベルの英語での読書を十分行なってこそ多読の効果が得られるので、²⁾ 急いで上のレベルの本を読まないように注意した。また、授業外でも読むことが多読成功への道である点も伝えた。

一方の音読は、読み聞かせのスタイルをとり、ペアでストーリーを読んでいった。I Can Read Books (ICR) シリーズのレベル1と2を中心に読んだ。担当教員は、文の抑揚や発音を直したり、学

生とストーリーの内容について話したりしながら、学生が楽しく正しく音読できるように指導した。その他、短いストーリーの訳読も行い、学生の注意が常に英語に注がれている状況を保つように心掛けた。

2) 読書状況

音読と黙読、副教材で用いたミニストーリーの語数を合わせた総語数は、表1のとおりである。目標として示した10万語以上を読んだ学生は2名だった。2011年度、ラングが「ライティングI」(英語文化系1年生対象)で授業内多読を実施した時も10万語以上は2名だった。学生が他の授業を受講しながら継続的な多読を行った場合、半期で2名程度が10万語を超える読者層だといえるだろう。

表1「多読演習A」読書状況

| 読書語数 | 人数 |
|---------------|----|
| 100,000以上 | 2 |
| 80,000～99,999 | 2 |
| 70,000～79,999 | 2 |
| 60,000～69,999 | 3 |
| 50,000～59,999 | 0 |
| 40,000～49,999 | 2 |
| 30,000～39,999 | 6 |
| 20,000～29,999 | 5 |
| 19,999以下 | 3 |

「多読演習A」では、過去の多読クラブの活動や「ライティングI」と比較して読書量があまり伸びず、平均は約4.9万語だった。2009年後期多読クラブの平均は約6.2万語、2010年前期多読クラブの平均は約5.7万語、2011年度前期「ライティングI」の平均は約6.0万語であった。³⁾「多読演習A」の授業時間内でのおおまかな読書量を出してみると、部屋の移動を考慮して読書時間を35分とし、Stageの低い場合は本の交換に時間がかかるので1分間76語程度の速度で読むとすると、⁴⁾1回の授業で2660語となり、13回の授業では約3.5万語となる。

しかし「多読演習A」では、読書量が3.5万語以

下の学生が11名いた。読書語数が伸びなかった学生は感想で、「授業を多くとっていたので、図書館に通うことが少なかった」、「授業以外で図書館を利用することが少なかったので、多読本を読むことがあまりなく、結果的に語数が少なくなった」とその理由を述べていた。低いStageの本は、登場人物やそれぞれの性格、そして描かれている絵そのものに慣れたりするための時間が予想より長くかかっているようである。前期に「多読演習A」を履修した学生はほぼ全員が後期の「多読演習B」を継続して現在履修している。急がばまわれの多読である。受講生のほとんどが多読を継続しようという前向きな姿勢を持ったという点を評価したい。また、来年度に向けては、学期途中の記録手帳チェックの時、個々の学生の読書状況をもう少し詳細に把握し、指導することとする。

3) アンケート結果

図1は、授業の最終回に実施したアンケート結果である。アンケート内容は、これまで多読クラブや授業などで行ったものと同じである。各項目が5段階評価で、5が「とてもそう思う」、4が「まあそう思う」、3が「どちらでもない」、2が「あまりそう思わない」、1が「全くそう思わない」である。アンケートの項目は以下のとおりである。

- 問1 英語の本を読むのに抵抗がなくなった
- 問2 本以外でも(新聞、教科書、問題集など)英語で書かれた文章を読むのに抵抗がなくなった
- 問3 英語を読むスピードが速くなった気がする
- 問4 本を読むのが楽しくなった
- 問5 語彙が増えた気がする
- 問6 リーディングの実力がついた気がする
- 問7 文法力がついた気がする
- 問8 これからも続けていけそう
- 問9 他の人にも多読をすすめた
- 問10 読書のペース(1日1時間程度)はちょうど良い
- 問11 本の難易度はちょうどよい

問12 本の種類が豊富だと思う

問13 本数は十分だと思う

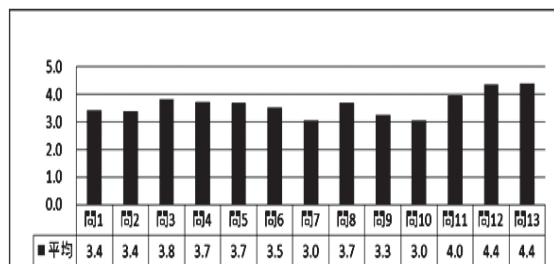


図1 「多読演習A」アンケート結果

最も高い数値を示したのは、問12、13で、多読本の種類や冊数に関する質問である。図書の整備が進んだので、昨年のアンケート結果とほぼ同じ数値だった。3.5以上は、問3の3.8、問4の3.7、問8の3.7、問11の4.0だった。昨年の「ライティングI」、「多読クラブ」のアンケートと比較すると全体的に数値はわずかに低いが、多読により読書のスピードが上がり、楽しく読書ができ、継続をしたいという思いを持った全体的傾向が読み取れる。問7と問10が3.0という数値だった。過去のアンケートでも問7の文法力の向上に関しては全体的に低い数値だが、これは後期の結果と比較して様子を見ていきたい。

今回、問10の読書ペースに関して低い数値となっていた。授業時間内のみで読書をした学生にとっては、週1回35～40分の読書では、短すぎるという意味だろうと考えられる。授業時間以外で読書をするには、図書館へ行って閲覧室で読書をするか借り出す必要がある。図書館を利用する時間がない学生や、利用する習慣があまりない学生にとっては、授業時間割に従い図書館へ向かい、そこで読書することが大切な時間となっていることがわかる。問1の数値は3.4で、過去のアンケートの4.1や4.2の数値と比べ特に低かった。これも平均読書数が未だ低い段階での回答であり、後期授業の結果を見ていきたい。

シリーズの評価では、ORTシリーズが登場人物が変わらず読みやすいという理由で人気が高かった。‘Magic Key’のエピソードを多くの学生が興

味深く読んでいた。一方、音読をしたICRシリーズでは、「絵が可愛い」Fancy Nancyものが人気を集め、「語感が良くて音読に適していた」という感想もあった。

授業全体の感想は、「レベルが上がるにつれて難しくなったが、簡単な本から順に読んでいったので少しずつ慣れることができました」と、「こんなに多く読んだのは初めてでした。夏休みにも、読み続けていきたいです」、「面白く読むことはとても大切だと思った」、「少し読めるようになった気がする」など、今後につながるものが多かった。

第2回と第16回の授業で実施したプレテスト、ポストテストでは、特定の文法事項に関する知識定着や、語順の自然な定着を見ることが出来ることを期待したが、それらを示す明確な結果を得ることはできなかった。点数上は伸びを示したが、英語文化系学生には、週7科目の英語専門科目が開講されており、平均点の伸びを多読の効果と直接関連づけることはできない。多読の授業導入の効果を具体的な数字で示すことは難しいが、学生が読む英語量は確実に増加しており、さらに後期の「多読演習B」をほぼ全員が継続して受講していることから、読書量を増やそうとする前向きな姿勢の育成と、英語読書に対する関心を高めることはできたと考える。

4. Graded Readersの活用

1) 「英米文学を読むB」

2010年度後期、2011年度後期、2年生を対象とした竹森担当の「英米文学を読むB」で、Graded Readersを課題図書として用いた。本学では英米文学分野の入門科目として「英文学入門」、「米文学入門」がある。「英米文学を読むB」は、「英米文学を読むA」、「英米文学を読むC」とならんで、主に作品の講読を行なっている。これらは英米文学について学ぶ授業でもあり、かつ、英語作品を扱うことから英語学習的な側面を持つ。

「英米文学を読むB」では現代作家による短編を扱っている。3～4回で一編を目安に、異なる著者による3編の短編を読み、作品の分析、他の作品との比較等を行なっている。いずれの作品も、内容の

要約だけで済ませる箇所もあれば、作品理解のために精読して説明を行なう箇所もある。また、授業のなかで、学生の理解を確かめながら進めなければいけない箇所もある。このように、授業では、教員の指導、あるいは補助があって読むことのできる作品を読んでいる。

一方、Graded Readersを用いた課題は、多少の細かな点は飛ばしても大意をつかみながら自力で読み進める読書を目的とした。教員などの補助なしで、自分のペースで英語の作品を最初から最後まで読み通す体験をし、英語の読書で得られる理解や喜びを知ってもらうことを意図した。また、Graded Readersには名の通った文学作品が揃っているため、英米文学の名作を知る入口にもなり、授業の目的に叶った課題である。

選んだ作品はCharles Dickensの *A Christmas Carol* である。守銭奴の主人公スクルージが改心するというこの物語は、主人公が幽霊に連れられて過去、現在、未来の世界を次々に訪問していくという展開で、構成が分かりやすい。また、これまで何度か映画化された作品で、近年のディズニーの映画もあり、親近感を抱きやすい。さらに、クリスマスの物語のため、冬の課題にちょうどふさわしいということもある。本学所蔵のGraded Readersの *A Christmas Carol* は、Oxford Bookworms (OBW)、Penguin Readers、Macmillan Readersのものがあり、3万語程度の原作の分量は、どのシリーズも一万語ほどにまでまとめられているが、シリーズのレベル、そして文章を比較して、OBWのものを選んだ。

冬休みに入る前に課題の説明を行ない、冬休み明けに内容理解のテストを行なった。内容理解テストはOBWに準拠した問題集 *Oxford Bookworms Library: Tests Stage 3* をもとに作成した。

課題説明では、作者や作品の説明だけでなく、おおまかなあらすじの説明も加えた。また、2011年度は2009年公開のディズニー版の映画の冒頭部分を流して導入にした。あらすじの説明や映画などにより、読解力や先を予測する力を養う機会が失なわれるという見方もあるが、読書の補助としての役割を

重視した。この授業では、英語が専門ではない日本語文化系、文化資源学系の学生が比較的多く履修していた。そうした学生のことも考え、英語の文学作品に馴染みを持つことが重要であると考えた。また、*Oxford Bookworms Library: Tests Stage 3* の問題10問をサンプルとして配布し、読書レベルの目安にしてもらった。

休み明けの内容理解テストは、各自持参のテキストを使用して行なうもので、上記問題集をもとに作製した20問の選択テストを行なった。この問題集ではSetting、Characters、Dialogue、Vocabulary、Plotと項目別に10の選択問題が用意されている。このうちDialogueの問題は、誰が言ったせりふか、という問題で、機械的なせりふ探しになると考えたため除き、Vocabularyの問題は、テキストの文脈なしで解答できる単語テストになると考えたため除いた。そこで、Setting、Characters、Plotから問題を20問選び、選択にあたっては5つの章からなるテキストに等しく解答が分散されるようにした。さらに、それぞれの問題に解答のヒントとなる章の番号を記しておき、解答のヒントとし、事前に配布していたサンプル問題も含めて出題した。1問1点、計20点満点である。

2010年度は欠席者を除く32人が受験し、得点は最低11点で最高が20点、平均は17点だった。2012年度は8名が受験し、最低10点で最高が20点、平均は16点だった。事前のあらすじ説明もあり、サンプル問題もあるので、担当者はテストでは8～9割の得点を見込んでいた。この結果は期待通りのものであった。

学生が分からなかった箇所、あるいは、先回りして、学生が分からないだろうと思われる箇所を教員が解説する授業は大切である。痒いところに手が届く導き手があってこそ理解できる箇所、物語はある。読解力の向上はそうした文章の読解の積み重ねであろう。ただ、それではいつまでも、英文読解の授業から抜け出すことができない学生が出てくる。Graded Readersを使用した課題では、学生ができるだけ快適に、思い切って自分のペースで物語を楽しむ、あるいは英語で日常的な読書を行なう機会だ

ということを強調した。そのため、課題テストの負担は軽くし、物語を理解できる範囲で読み進められれば良いと説明した。

こうした課題であれば、内容を理解したうえで、物語を楽しむ読書ができると思われる。実際、2010年度の授業で、授業で読んだ他の3つの短編とあわせてどれが一番面白かったか、理由も含めて学生に尋ねてみたところ、34人の受講生のうち7人が *A Christmas Carol* を選んでいた。こうした数字にどのような意味を求めるかは、いろいろな見方があるだろう。もちろん、比較対象となる他の作品との関係もある。担当者の意図としては、こうした面白さによる比較を求めることで、英語が読めたかどうか、といった英語学習のような姿勢をなるべくとらせないことにあるため、こうした問かけ自体に意味があると考えている。冬休みの自習課題としては意外に多い回答数であり、授業で読んだ他の3つの短編に比しても面白いと判断していただだけでも、内容を楽しむ読書をしていたことがうかがえるだろう。

2) 「ライティング」

ラング担当の2011年後期2年生対象の「ライティングⅣ」、2012年前期1年生対象の「ライティング基礎」、2年生対象の「ライティングⅢ」において、*Bookworms Club Stories for Reading Circles Bronze* を用いたリーディングサークルによる教育を行なった。受講生は課題としてテキスト中の Graded Readers (YL2.0～2.8) を読み、授業では物語の内容について30分間程度のグループディスカッションを行なう。各グループは6人で構成され、要約をする担当、ストーリーの内容と自分の経験の関連づけをする担当、ストーリーの文章で参考になる語句や表現を、選んだ理由と共にまとめる担当など、それぞれが役割を担う。グループディスカッションに向けて6人が役割に従って英文のワークシートを作成することがライティングの課題である。

学生が自分で読んで理解できるレベルの物語を選んでいるので、その物語について、学生はそれぞれの担当の立場から文章を準備し、英作文をする。こうした作業は、与えられたシチュエーションや表現

方法を用いた英作文ではなく、自分の伝えたいことを英語で表現しようとする意欲を促すことができる。英語の実践力を高めたいと思っている学生には、自分の考えや経験を英語で伝える機会をできる限り多く与える指導が重要である。

学生には事前にワークシートを提出させ、ディスカッションの準備ができていることを確認した。授業では、グループディスカッションの内容を聞き、ディスカッションにも随時加わることで、学生が物語に十分興味や関心を持てたか、各グループメンバーが意見を交換できているかなどを確かめながら、授業が円滑に進むように指導した。今後もリーディングとライティングの組み合わせを工夫し、学生の表現意欲や表現力を伸ばす授業を展開していけるように多読教材の活用方法を検討していきたい。

5. 公開講座

平成24年度の公開講座として、小玉は成人を対象とした「英語絵本の音読と『読み聞かせ』に挑戦」を実施した。この講座は、本学図書館本館に整備した多読用図書を活用し地域貢献に役立てていく試みであり、昨年度実施した中学生向け講座の第二弾である。⁵⁾パンフレットでは、英語の絵本や多読用図書を参加者が一緒に音読して楽しむこと、英語初習者向け講座であるが、文法の説明や英語の日本語訳などはしないことなどを説明した。英語のストーリーを英語で楽しむという多読図書の読み方を音読に応用したものである。そして、英語の基礎力アッ



公開講座風景

プにつながればなお良いという立場での講座であった。主たる教材として、多読用図書のORTシリーズ、Eric Carl やStan and Jan Berenstainの絵本などを用いた。

日程は7月30日（月）から8月3日（金）までの5日間で、時間は学生の授業時間に合わせて2コマ目（10時40分から12時10分）に設定した。参加申し込みは21名だったが、図書館の利用スペースや読み聞かせの実践指導などを考慮し、受け付け順に12名を受け入れた。そのうち実際の参加者は9名で、内訳は女性6名、男性3名、年齢層は58歳から79歳だった。

内容は、①ウォームアップとして、Tongue Twister や歌など（‘Peter Piper’, ‘She Sells Seashells’, ‘Humpty Dumpty’, ‘The Itsy Bitsy Spider’など）で、口をしっかりと動かし、声を出す。②ORTシリーズの音読をペアで行なう。③Eric Carl の*Draw Me a Star, From Head to Toe, Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*, Stan and Jan Berenstainの*The Berenstain Bears and the Spooky Old Tree, The Lady with the Alligator Purse*, Dr. Seussの*In a People’s House*などの絵本の読み聞かせの練習を行なう。

ウォームアップのTongue Twisterは覚えてしまうまで繰り返し練習をした。また、手の動きが入る歌は、しっかりと動作も入れて練習した。ORTシリーズの音読は、レベル3、読みやすさレベル0.3からスタートし、レベル4までを中心にした。短期間だったのでレベルを上げることや語数を増やすことは目標にしないで、声をしっかりと出して相手に読み聞かせせるという姿勢を常に持って音読を行なうように伝えた。中心となる活動の絵本の音読では、CD付きの絵本を選び、全員でCDを聞いて読みの練習を繰り返したり、互いに読み聞かせを行ったりした。最終日はおはなしレストランライブラリー（本学の子ども向け図書館）で、読み聞かせの実践を行った。

参加者の英語レベルは幅広く、パンフレットでは初習者向け講座であると説明したが、長期の英語学習歴を持つ人や、中には子供向けに英語を教えた経

験のある参加者もいた。一方、久しぶりに英語を聞いたり読んだりするという参加者もいた。結果として、参加者同士が発音などを教えあったり、読み聞かせに関しての意見を伝えあったりして、協力しながらの活動ができ、互いにより良い読みをしようとする姿勢や仲間意識が高まった活動となった。

参加者には毎回感想を書いてもらった。その感想をもとに講座の様子を紹介する。第一日目は、「久しぶりの英語で、読み方を思い出すことからです」、「久方ぶりに声を出して英語を話しました。易しい文章ですが、アクセント、イントネーションが昔のようにはできません」など、久しぶりに声を出して英語を読むことで、「少しずつ恥ずかしさもぬけてきて」、「とても楽しめました。声を出すっていいですね」、「このレッスン、終日まで来ます」と一日目の少し興奮気味の感想を頂いた。

二日目はORTもレベル4に挑戦したり、Berenstainの*The Berenstain Bears and the Spooky Old Tree*の読みの練習をしたりしたためか、「だんだん難しくなり、時々発音できない単語も出てきました」、「The level of today’s lesson was up. It was a little difficult.」と、一気に難しくなってしまったようだ。また、‘Peter Piper’他の早口ことばもできるだけ文字を見ないで練習することを勧めた結果、「早口ことばを覚えるのが大変です。文字を見ずに話すのは難しい」、「早口ことばがなかなか覚えられないので、家でも少しずつ慣れるようにしないと、と思いました」などの感想があり、少し無理強いたようだと言及した。しかし一方では、「二日目となると少し英語に慣れてきて」、「レベルが上がり、さらに楽しくなってきました」という感想もあり、成人対象の短期間の講座で扱う内容やレベルに関して、参加者の様子を見ながらの調整が必要である点を再確認させられた。

三日目は読み聞かせに用いる絵本を選ぶために、CD付きの絵本を次々に聞いたり読んだりしたため、‘panic’を感じた受講生もいた。しかし全体的には、「英語はリズムに慣れることが必要」で「リズムをつけて話すと意味が良く通じるように思う」というように、「必死に」かつ「楽しく」絵本の読み聞か

せ練習ができたようだ。そして四日目、実践形式での「読み聞かせの練習は思った以上に難し」かったが、「ペース、強調する言葉、抑揚を考えて」、「互いに助け合いながら、非常に楽しく」練習ができた。五日目は、夏休み中だったということもあり、おはなしレストランライブラリーにはいつもより多くの子供たちが集まっていたが、全員が練習の成果を十



英語絵本の読み聞かせ

分に出し、楽しく読み聞かせの実践ができた。

「先生の口を見ながらまねて」読んだり、歌ったりして、声を出す楽しさ、何とか自分で読む楽しさを体験した参加者の感想もあり、この公開講座を通して、英語を楽しむためには「声を出すこと」の果たす役割が大きいことを実感した。

6. おわりに

今年度はこれまでの活動の延長として、新たに「多読演習」が行なわれることになった。今後、授業成果の検証を重ねていきたい。

筆者らの活動は、これまでのところ、大きく分けて二つの方向がある。多量のインプットを目指す、いわゆる多読教育が当初からの活動である。加えて、多読のために揃えたGraded Readersなどを、多読

ということではないが、課題やテキスト等に用いるという多読教材の活用である。これは授業だけでなく、公開講座にも活用の道が広がった。

これら多読を基盤とした教育をもとに授業の連携を広げ、学生の英語力を向上させるための英語教育プログラム作りを今後さらに進めていきたい。

【付記】

本研究活動は、平成二十四年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

- 1) 『多読多読マガジン』19号 10-28を参照。
- 2) 西澤を参照。
- 3) 竹森、小玉、ラング「多読教育の発展的試み」13を参照。2009年度後期の多読クラブの実施回数はテストを除き26回で、出席率は81%だったので、実質回数は約21回、2010年度前期の多読クラブは24回実施、出席率は61%だったので、実質回数は約14回と考えられる。2009年の多読クラブは回数が多いが、クラブ活動も授業内での多読活動回数とはほぼ同じ回数とみなして考察をおこなった。
- 4) 竹森、小玉、ラング「多読教育の成果と展開」22を参照。
- 5) 竹森、小玉、ラング「多読教育の発展的試み」14-6を参照。

参考文献

- 竹森徹士、小玉容子、ラング クリス「多読・多聴による英語力向上を目指して」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』第48号(2010): 47-52.
- 、「多読教育の成果と展開—2009、2010年度の多読教育から—」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』第49号(2011): 17-28.
- 、「多読教育の発展的試み」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』第50号(2012): 9-18.
- 西澤 一、吉岡貴芳、伊藤和晃「英語多読が効果を上げるしくみと多読授業の成否要因に関する一考

察」『工学教育』第59巻（2011）：66-71.
『多聴多読マガジン』19号（2010）コスモピア.
Bookworms Club Stories for Reading Circles
Bronze (Stages 1 and 2). Oxford: Oxford UP,

2007.
Oxford Bookworms Library: Tests Stage 3.
Oxford: Oxford UP, 2008.

（受付 平成24年11月 1 日，受理 平成24年12月 3 日）

